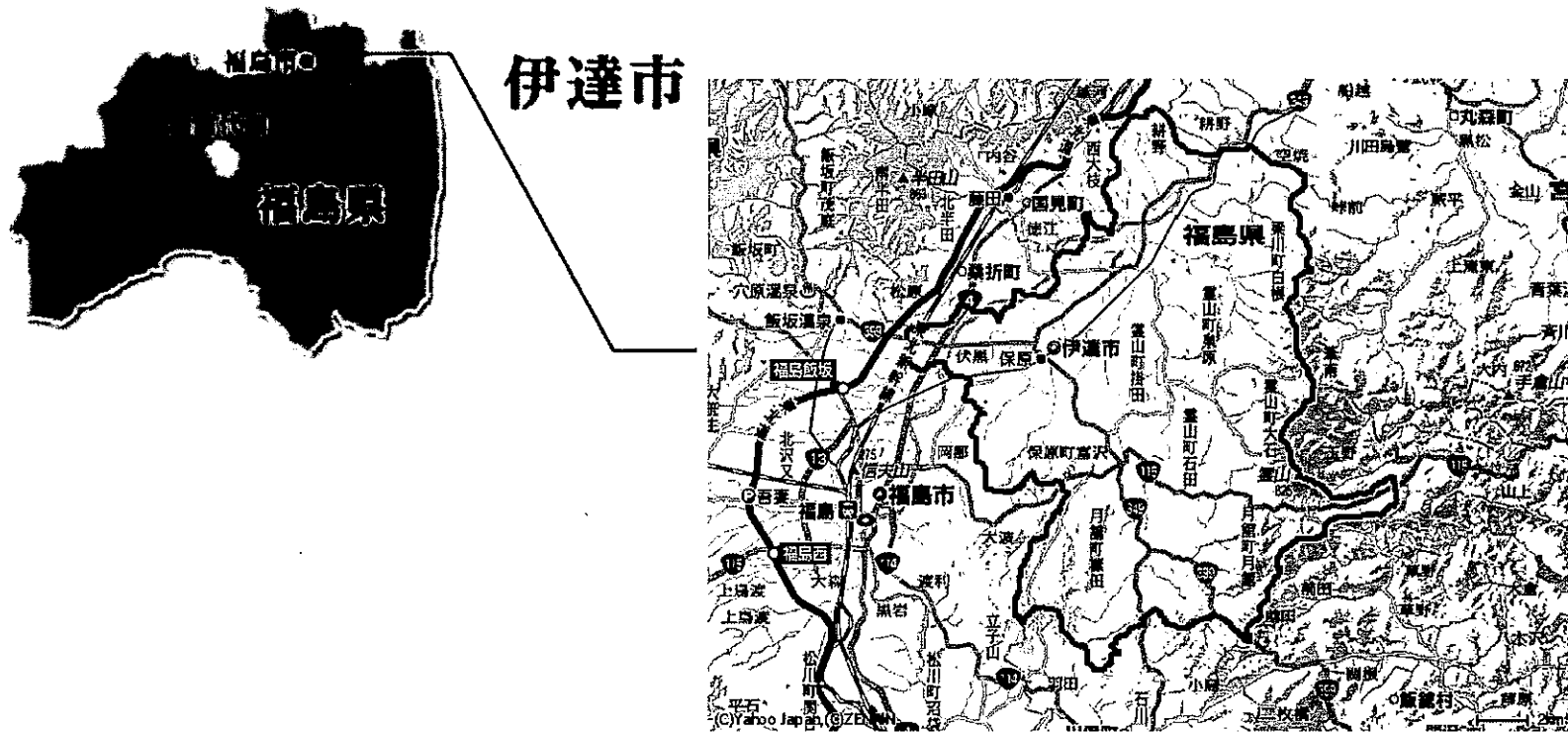


放射性物質汚染対策顧問会議 低線量被ばくのリスク管理に関するワーキンググループ (伊達市における放射能被害対策と課題)

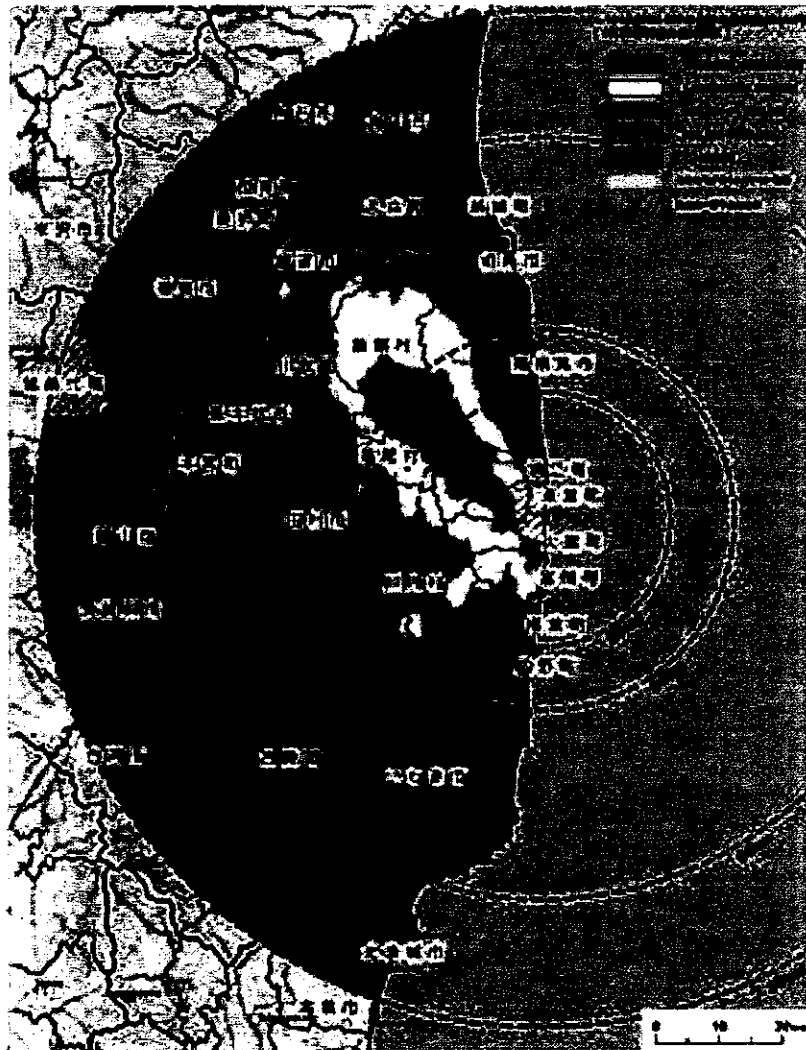


2011.12.12 福島県伊達市長 仁志田 昇司

福島第1原発事故により環境へ放出された放射能

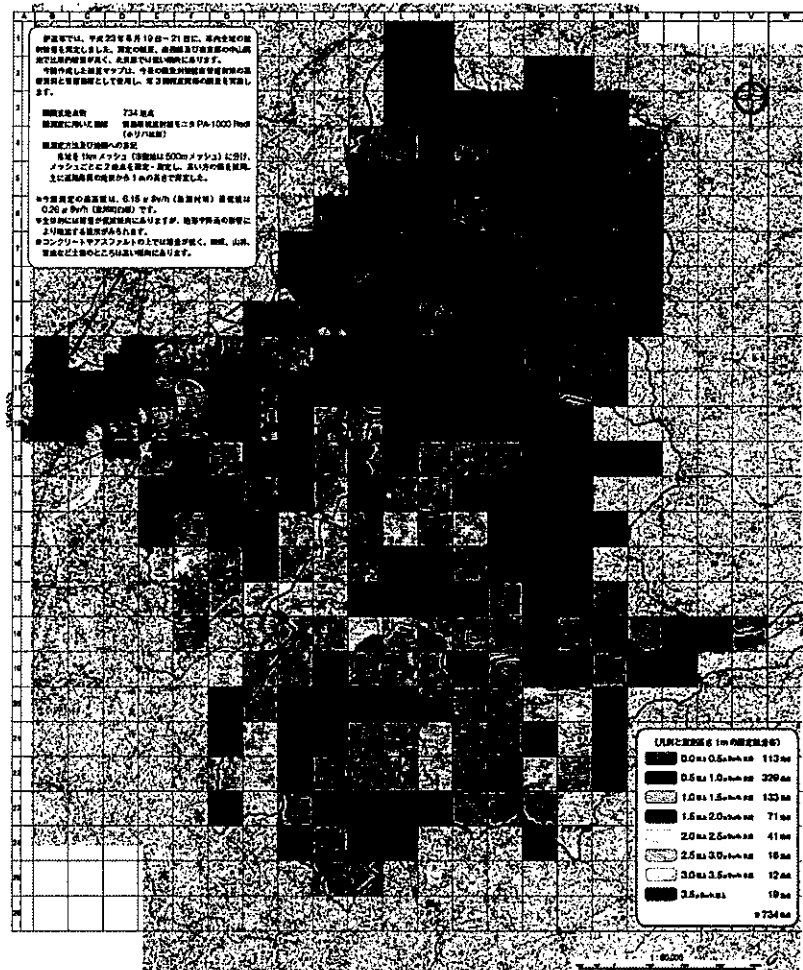
別紙2

文部科学省及び米國DOEによる航空機モニタリングの結果
 (福島第一原子力発電所から80km圏内のセシウム134, 137の地表濃度の要約表の合計)



伊達市一斉放射線量測定マップ

(平成 23 年 8 月 19 日～21 日実施)



問い合わせ先：伊達市災害対策本部 環境防災課 (024-575-1003)

行政への不信の具体的事象

- ・SPEEDIの公表遅れ
- ・「直ちに健康被害はない」、との官房長官発言
- ・原発の状態についてのプレス発表と現実の乖離
- ・年間20mSvの基準値の妥当性 → 避難基準(3.2 μ Sv/h)、
→ 校庭の屋外運動基準(3.8 μ Sv/h)
- ・東大教授の涙の記者会見 → そんなに危険なのか
- ・爆発直後の避難が必要だった → ヨウ素による高線量時期(3~5月)
⇒ 恨み

行政への不信の具体的事象

- ・強制と勧奨(自主的判断) → 強制避難の生活上の犠牲は大きい
(自主的判断の重要性)
- ・地域と地点 → コミュニティを壊す(隣は指定されたが・・・)
- ・賠償問題による更なるコミュニティの崩壊の加速
- ・原発事故は現在進行形、しかも人災(津波の被害は大きい、天災)
 - ⇔ 国、東電の責任だ。除染は国、東電が行うべきだ
 - ⇔ 被害が定まらない、将来の健康被害、将来への不安(子ども)
- ・米の安全宣言を撤回 → 不十分な検査、まあ、良いだろう！
との安易な決定

行政に対する不信のまとめ

- ① 情報を隠しているのではないか
- ② 指示、対策が遅い
- ③ 示される基準が矛盾する、または分かりにくい
- ④ 判らないことは安全側での対応が危機管理の基本であるのに、安易な対策となっている。(県)
- ⑤ 省庁、委員会等の決定が現場の実態と合わないものがある。(例、避難と賠償)
- ⑥ 人災であり、絶対安全と言ってきた責任を取れ

子どもに対する不安の実態

・子どもの基準は大人と同じで良いのか？ ⇔ 学者の意見がマチマチ

・少子化と晩婚化による高齢出産 → 過剰な愛情



放射能に対する過剰反応

・モンスターペアレントの存在 → 教師から行政へ

・外部被ばく → とにかく避難したい ⇔ 避難勧奨地点に指定されたい

・内部被ばく → 福島県産を給食に使うな、(風評被害対策との矛盾)

家庭内で二つの食卓 → 家族コミュニティの崩壊

子どもへの不安(健康)対策

- ・外部被ばく対策 → ガラスバッチの付与
サマースクール
通学バス(通学路での被ばく対策)
- ・内部被ばく対策 → WBC検査(早期に、全員)
食品検査器による随時自主検査体制の整備
(自分の判断と納得)
移動教室の実施(チェルノブイリの例)(検討中)
- ・放射能に対する過剰反応 → 心理相談の必要性(説明を理解しよう
としない)
放射能教育の実施(放射能を正しく恐れよ)
- ・基本的姿勢 → 不安の解消に資すると考えられることは、やってみる